

「ボウリングの日」に 東京ボウリングセンター に行ってみた

▲JR吉祥寺駅から徒歩約5分、吉祥寺第一ホテル地下1階にある18レーンの東京ボウリングセンター

民間初のボウリング場として昭和27年(1952年)12月20日に東京・港区の青山に誕生した東京ボウリングセンターが、今は東京・武蔵野市の吉祥寺に場所を移してその歴史を引き継いでいることを、知っているボウラーも少なくなっているのではないだろうか。6月22日のボウリングの日に、東京ボウリングセンターを訪ねてみた。

「公園緑地法の制約で 青山から吉祥寺へ…」

文久元年(1861年)6月22日に、長崎・出島の外国人居留地に「インターナショナル・ボウリングサロン」が開場したとの記述が、長崎で発行されてい



▲当時実際に使われていた手動のピンセッター

た同日付の英字紙に残されていた。日本ボウリング場協会では、この日を日本ボウリング発祥の日として、昭和47年(1972年)に6月22日を「ボウリングの日」と制定して今日に至っている。そしてもうひとつ、日本のボウリング史を語る

法の関係で、高い建物を造れなかったために、同地での再建を断念したと聞いています(武田秀樹さん)。当時は第一ホテルグループが経営していたために、東京・吉祥寺に建設予定だった吉祥寺第一ホテル(1987年5月11日開業)地下1

上で欠かせないのが、民間初のボウリング場、東京ボウリングセンターの開場だろう。

現在その地にボウリング場はない。「建物が老朽化してどうするかとなったときに、公園緑地

階にボウリング場(18L)を造り、そちらに移転された。

今回お話をうかがった武田さん(62歳)は、学生時代(法政大学)はボウリング部に籍を置き、ホームセンターでもあった東京ボウリングセンターでアルバイトをしながら練習を積んだそうだ。

「法政大学のほか、青山学院大学、山脇学園短期大学などが東京ボウリングセンターをホームとしていました。関東学連は6部ぐらいまであって、法政大学は当時1部でしたが、強かったのは亜細亜大学でしたね」

卒業後は第一ホテルに就職、営業職が長かったそうだが、定年までの最後の10年ほどは吉祥寺第一ホテルの東京ボウリングセンターを担当、2年前に定年を迎えたあとも、シニアスタッフとして同センターで勤務している。



▲「4~5年前からまた真剣に投げ始めた」と武田さん

「歴史を受け継いでいるという意識はもちろんあります」と武田さん。ボウリング場へと続く階段の途中には、1投ごとにピンボーイが手でセットしていたという、開場当時のままのピンセッターが展示されているなど、さりげなく歴史が感じられる工夫がされていた。今後もできる限り、その歴史をつないでいってほしいと思った次第。

中山律子プロ生活50周年記念パーティー 「ボウリングの日」にレジェンド降臨!



▲謝辞を述べる中山プロ。手にした原稿には一度も目を落とさず、ごく短い挨拶で済ませてしまうという律子さん「らしさ」が全開

ボウリング界に女子プロが誕生して50年。1期生の一人として半世紀を生き、今なお業界

随一の知名度を誇る「リビングレジェンド」が、今年10月の誕生日で喜寿を迎える中山律子



▲囲み取材に応じる中山プロ。この日は読賣、毎日ほか一般メディアの記者も多数取材に訪れていた



▲ビジョンに映し出された往年の名勝負に釘付けのJLBC関係者席。杉本勝子プロ(4期)にマイクを向けているのは進行役の青木剛プロ(45期・ムサシボウル所属)

口(現JPBA & JLBC名誉会長)だ。

「ボウリングの日」の6月22日午後、彼女のプロ生活50周年を記念したパーティーが、川崎市高津区のOKKA634ビル3F「メガレイジ」にプロ仲間や業界関係者ら110名を招いて開催された。

1970(昭和45)年8月、中山プロが女子プロ第1号の300点を達成し、空前のボウリングブームの発火点となった「伝説のTVパーフェクト」をはじめとす、往年の名勝負シーンが

デジタルリマスターのカラー映像で流されるなどの趣向が凝らされ、会場は終始明るく華やかな空気に包まれた。

OKKA634の5・6Fは中山プロが2007(平成19)年から顧問として籍を置くムサシボウル。6Fフロアには同プロにちなみ「りつこの部屋」という瀟洒なサロン(談話室)があり、毎週金曜日には「さわやかトーナメント」と銘打ったフリーエントリーの大会を開催して、中山プロが参加者に適宜アドバイスを送っている。また、この日

の午前中には「律子さんプロ50周年記念みんなでさわやかボウリング」と題した会員限定の競技会(3G)が開催され、パーティー中に成績発表と表彰式が執り行われた。

囲み取材でプロ生活50周年を振り返り、「全国各地でたくさんの人と出会ったのがいちばんの幸せ」と語った中山プロ。今後は「業界発展のために」ジュニアの指導に注力しつつ「一生楽しくボウリングをやりたい」という。律子さん、末長くお元気で!

▶こちらはJPBA関係者席。北岡義実プロ(中央20期)は本物の投球技術がなければ達成できなかった時代の偉業と中山プロの女子プロ第1号パーフェクトを称えた

